

幼稚園・保育園による「子ども主体の協同的な学びプロジェクト」 合同発表会 結果報告

【日 時】平成30年2月26日（月）18時00分～20時30分

【会 場】すみだリバーサイドホール イベントホール

【来場者数】267人
 公立保育園143人、公立幼稚園15人、私立保育園43人、私立幼稚園14人、
 一般参加者35人、区職員17人



《開会挨拶》
 （写真左）山本区長
 （写真右）長田氏（乳幼児ワーキンググループ専門部会長）



《プロジェクト趣旨説明》
 大豆生田氏
 （墨田区子ども・子育て会議会長）



《会場の様子》
 幼稚園・保育園関係者をはじめ、
 多くの方にご参加いただきました。

【内 容】

■第1部（18時15分～19時20分）

取組発表

【発表園】

立花幼稚園、言問幼稚園、横川橋保育園、ひきふね保育園



《取組発表》
 （写真左から）立花幼稚園、言問幼稚園、横川橋保育園、ひきふね保育園
 4園とも特色ある「子ども主体の協同的な学び」の実践を発表し、それぞれの担当アドバイザーからコメントをいただきました。
 会場全体が4園の発表とアドバイザーのコメントを真剣に聞き入り、発表後には大きな拍手をしていました。

■第2部（19時30分～20時25分）

パネルディスカッション

【コーディネーター】

大豆生田 啓友 氏（玉川大学大学院教授、墨田区子ども・子育て会議会長）

【パネリスト】

高嶋 景子 氏（田園調布学園大学大学院教授、墨田区子ども・子育て会議委員）

岩田 恵子 氏（玉川大学大学院教授）

松山 洋平 氏（和泉短期大学准教授）

三谷 大紀 氏（関東学院大学准教授）



《パネルディスカッション①》
 コーディネーター：大豆生田氏



《パネルディスカッション②》
 パネリスト：（左から）高嶋氏、岩田氏、松山氏、三谷氏



《パネルディスカッション③》
 会場より質問表で声をいただきました。内容の濃い話しになりました。

子ども主体の協同的な学びプロジェクト ～子どもとともに～

平成 30 年 2 月 26 日

墨田区立 立花幼稚園

1 所在地

東京都墨田区立花 1-25-9 東武亀戸線 東あずま駅下車（徒歩 5 分）

2 教育目標

人権尊重の精神を基調に、健康で心豊かな幼児の育成を目指し、生涯にわたり生きる力の基礎を培う教育を推進し、次の教育目標を設定する。

- 心も体も元気な子ども（げんき）
- 自分で考え行動する子ども（やるき）
- 最後まであきらめない子ども（こんき）

3 学級編成

2 年保育 4 歳児	き く組	24 名
2 年保育 5 歳児	さくら組	20 名
合計		44 名

（平成 30 年 2 月現在）

4 研究の概要

（1）『子ども主体』とは

私たちは『子ども主体』とは「発達に即した適切な環境の中で、『決定権』が子どもにあること」だと考えている。しかし、それは全てを子どもに委ねることではなく、保育者側の意図的・計画的な保育の構想が重要であり、子どもの主体性と保育者の主体性は切り離して考えられるものではないと考えている。



（2）『協同』とは

私たちは『協同』とは、「共通の目的に向かって意見を出し合い、分担したり協力したりしながら遊びや生活を進めること」だと考えている。そのためには、保育者の丁寧な子どもの姿に対する見取りと、意図的・計画的な準備や援助が重要である。

（3）幼児期の育ち

4 歳児：伸び伸びと
自己を発揮する



5 歳児：友達と一緒に
遊びや生活を創り出す



幼児は、初めての集団生活の中で、様々な環境と出会い、保育者との信頼関係を基盤としながら安定して過ごせるようになる。幼児期にふさわしい生活を通して、少しずつ自己を発揮し、人間関係を広げ、互いに関わりを深めていきながら、育ち合っていく。その育ちの中で、友達と一つの目的に向かって活動を進めることを通して協同する経験を積み重ねられるよう、発達に即した活動を意図的、計画的に取り入れ、進めている。

安定する

関わる

つながる

伝え合う

育ち合う

生かし合う
高め合う

4 歳児

5 歳児

年長 11 月 遊園地ごっこ

遠足で花やしきに行った経験から、
自分たちの遊園地を作る活動

(4) 実践事例：年長5歳児 11月 遊園地ごっこに向けての取組



ジェットコースター う〜ん・・・ **グループ結成**

積極的に意見を出す幼児がおらず、話し合いが進まない

このメンバーで大丈夫！？

どうする？

乗り物を作る

ぶつけても痛くないように、ふわふわを巻こう

続きにしながら、毎日少しずつ進めていった。

段々できてきたね！

周りの飾りを作る

共通体験がイメージにつながっていた

完成！

メンバーが集まり、互いにどのようなイメージをもっているのかを出し合う場面で、保育者は「どういうものが作りたい？」と投げ掛けた。ところが、積極的に意見を出す子どもがおらず、この日の話し合いはほとんど進まなかった。

次の日、保育者がイメージをかなり具体的に引き出したり、それぞれのやりとりを仲介したりする援助を行うと、少しずつ子どもたちから意見が出るようになり、イメージがかたまってきた。

共通のイメージが定まると、毎日続きにしながら、少しずつ乗り物作りを進めていった。形になってくると嬉しく、子どもたちの姿が少しずつ変わってきた。

ある日、子どもたちは、ただ乗り物を走らせるだけではなく、トンネルを作りたいと保育者に伝えに来た。紫色の絵の具を塗り、乾いたらそこに「びっくりしているおじさん」を付けると言う。子どもたちの言う「びっくりしているおじさん」とは一体何のことなのか疑問が湧いた保育者は子どもたちに聞いた情報を基に、インターネットで調べた。

すると、びっくりしているおじさんの正体は花やしきのジェットコースターのトンネルに飾られていた人物だった。次の日に子どもたちに確認すると「そうそう！この人！」と確証を得ることができた。保育者の知らないところで子どもたちは理解しており、共通体験がイメージにつながっていた。

その後、自分たちで並べた積み木の高さに合わせて段ボールを切り、壁を作って塗った。さらに、「もっと可愛くしたい」と、みんなで話し合い、飾りをリボンに決め、丁寧に仕上げていった。

完成したジェットコースターのコーナーには、大量のリボンが貼ってあり、その数にみんなが驚いた。

(5) まとめ 〈このテーマを通して学んだこと〉

○ 一人一人が活かされてこそその協同である

今回、改めて協同とはなにかを考えていく中で、全体を捉えるだけでなく、もっと一人一人の姿に目を向けることが大切であることを学んだ。「みんなで何かに取り組みればいい」、「でき上がればいい」という結果ではなく、プロセスの中で、一人一人が『他でもない自分がそこに必要とされている感覚』をどのようにもてるようにするかを常に考えながら一緒につくりあげていく意識をもつことが必要であるということを学んだ。

○ 一人一人のプロセスを捉える視点が大事である

一人一人の学びは異なり、プロセスの中に学びがある。それは、結果を捉えるのではなく、一人一人が何を考え、何をしようとしているのか…その姿を捉えることが大切であるということ、別々のことをしていても同じ目標に向かっていることが大事であり、保育者はみんなに同じことを経験させることだけに価値を置かず、もっと『一人一人の学びを読み取る意識をもつこと』が大事だと学んだ。

今後も、一人一人の学びを丁寧に読み取りながら、共に学び続ける保育者として、子どもたちの健やかな成長を支えていきたい。

当園は昭和 24 年 9 月に東京都の認可を受け開園しました。以来 60 年以上保育を続け、卒園児は 6,000 余名を数えます。平成 19 年には新しく園舎も建築され、さらに耐震のためにもう一方の園舎も平成 25 年 2 月に改築されました。隅田川や隅田公園など、周囲の環境も緑多い良好の地にあります。お寺の幼稚園として華美をさけ、園児の情操教育に力を入れ、良い習慣を身につける保育を地域の信頼のもと、教職員一同、努めています。昨年度に引き続き、2 年目のプロジェクト参加になります。

◎ 園の保育目標

清 明	仏さまを拝み、明るく素直な子に
強 く	どんなことでもやり通し、正しい考えをもつ子に
豊かに	人間性の豊かな表現力を身につける子に
仲よく	相手の立場をみとめあい、いのちを大切にする子に

◎ 学級編成

年少（3 歳児）：2 クラス（各クラス 2 人担任）→ばら組 31 名、さくら組 31 名
 年中（4 歳児）：2 クラス（各クラス 1 人担任）→ゆり組 33 名、きく組 30 名
 年長（5 歳児）：2 クラス（各クラス 1 人担任）→たけ組 28 名、うめ組 27 名
 フリー教諭配置（フルタイム 2 名、パートタイム 1 名）

◎ 5 歳児（たけ組 うめ組） 今までの経過

4 月：環境を整える

☆部屋を変えてみる

部屋の作りや位置、デッキのスペースを考えて、今まで年少で使っていた部屋を年長に、年長に使っていた部屋を年少クラスの部屋へと変更することにして、トイレの仕様やドアのカギなどの整備をしました。

☆大きなワゴンを置く

昨年まで年長で使っていた制作ワゴンを年中クラスへ置き、沢山材料を置いておけるワゴンを新しく年長用にしました。

1 学期

いろいろなものをつかって、いろいろな場所をつくったり遊んでみよう。

年長クラスに新しく設置した制作ワゴンに担任が素材を準備し、子どもたちが自由に使って良いことにしました。保護者の方にも協力して頂いて、廃材を集め、使えるように置いておきました。

いろいろな素材をえらんで自由につかってみよう

造形の時間で色々な素材をつかって制作をします。色々な素材をえらんだり、組み合わせてつくることに慣れ、自由遊びの時間でもいろいろなものをつかってつくったり、遊んだりするようになりました。

皆で協力してつくってみよう

造形の時間に皆でそれぞれを出し合って、ひとつのものをつくる体験をかさねていきます。

1 学期～2 学期

個人で考えてつくったもの➡複数でつくって楽しむ➡遊びのブームをつくろう

はじめは単素材でつくったり、遊んだりしていましたが、担任が用意する素材をかえたり、時には制限したりすることによって、つくるものが変わり、それを持ち寄って遊ぶことにより、さまざまな「遊びのブーム」がうまれました。

たけ組—こま遊び うめ組—お店屋さんごっこ

成道会お遊戯会での取り組み

プログラム内容がパターン化している。

昨年度まで・・・

年少：1 クラスを2 チームに分けて、ダンス。

年中：セリフの吹き込まれた音楽劇

年長：自分たちでセリフを言う劇

配役は、子どもたちの希望をききながら担任が決め、内容・セリフ・振り・衣装は全て担任が決め、作成している。

毎年、内容は違ってもよいはず・・・



今年度は、各学年とも今までの方法にとられずに、演目・内容を考えることにする。

（絶対に変えなくてはいけないわけではない）

「先生と子どもたちが一緒につくりあげる」ことを念頭におく。

年長は、子どもたちが話し合って決める要素を取り入れるようにする。

○演目の決定：2 クラス合同で実施する。2 冊の絵本から題材を多数決で決定。

○配役の決定：第 4 希望まで希望をとり、担任が決定。

○内容の決定：大まかな内容は、担任が決定した。配役グループごとに短時間で出し物をするににして、その内容を子どもたちで話し合って決める。

○衣装の決定と制作：各グループごとに意見を出し合ったものを担任がイラストにする。それをもとにして実際の材料を出し、グループ内で相談しながら衣装をつくっていく。

○小物の決定と制作：グループごとにサンプルを作った後に、皆で個々の物を作る。

○劇の練習

◎ 気づいたこと・今後の課題

- ・子ども自身が素材を生かして遊びに発展させるには、いろいろな素材に触れて使ってみる経験を積み重ね、慣れていくことが必要。
- ・用意する素材や場所をパターン化せず少し変えてみたり、時には緩く制限したりすることで、子どもたちが工夫する幅がひろくなっていく。
- ・「面白い」と思ったことには、期限を設けずにとことんつづけられる環境をつくると、空いた時間に同じあそびを自分たちでつづけている。
- ・子どもたちの「もっと」を引き出すためには、指示よりも保育者の「提案」が有効である。その提案は、必ずしも子どもたちの思いと合致するものではないが、子どもたちの様子を観察しながら、保育者の提案の内容を変化させていくことによって、子どもたちがその提案をききながら、「どうしたいのか」をより深く考えていくようになる。
- ・子どもたちですすめっていると、内容に「おかしさ」が生じてくる。その「おかしさ」に気づき、「だからどうなるのか」を考えることが大切。
- ・話し合いの場を少人数であったり、グループ・全体であったり、規模や話し合いの時間帯を変えることによって、意見の出しやすさや共有の時間をもつなど、保育者が工夫していくことが大切。
- ・保育者自身の探求心と遊び心が、子どもたちの「もっと」の気持ちや、発想を引き伸ばす要因ともなる。担任だけではなく、他の職員とも連携を取り、実際の場で共有することによって、より多くの気づきとその実践に結びつけることができる。
- ・周囲の「もっと」についていけない子どもの存在を気に留め、配慮する必要がある。

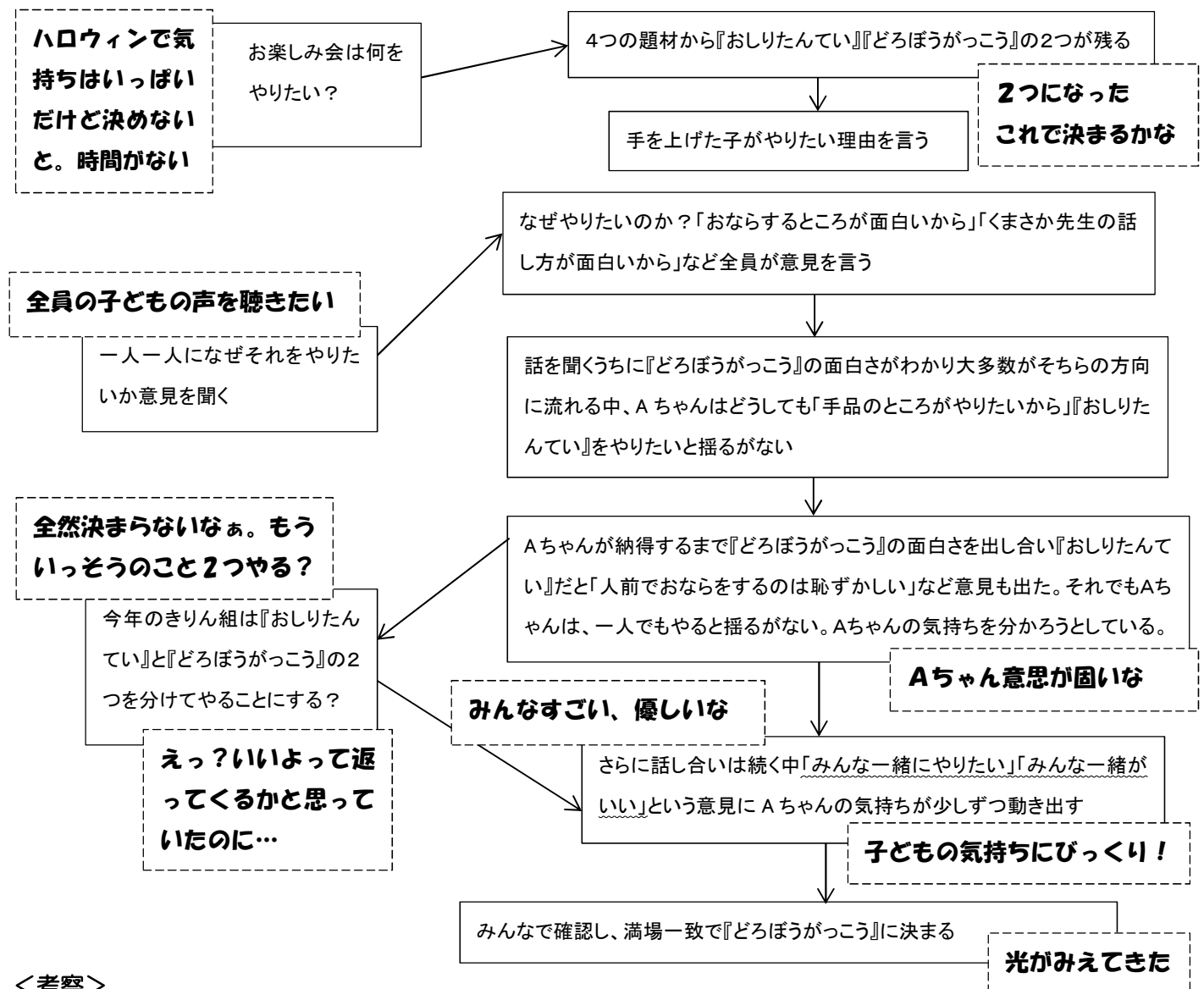
お楽しみ会の取り組み

★10/20 の出来事

(お楽しみ会は 12/8)

保育士の想い・関わり方

子どもの姿



<考察>

- ・様々な活動を通して友達とかかわり互いの思いや考えを共有していった中で、普段意見が言えない子ども自分の思いを伝え「そうだね」「いいね」と言われる経験が増えた。その経験の中で自信に繋がり、今回の話し合いでは子どもたちが何をやりたいか声が出るまで待つことができた。始めのうちは自分のことだけの意見だった子どもも友達のことを考えて思いやる意見が出てきた。子どもの発信がとても嬉しく面白さを実感した。
- ・ハロウィン活動の経験が土台になって今回の話し合いに繋がったと感じている。
- ・担任は「年長だから!」というプレッシャーがある。だからこそ担任が引っ張りがちな発表会。しかし、今回の取り組みの結果、子どもは「きりんぐみのみんな」でやった達成感と喜びが大きかった。
- ・話し合い活動がとても長く、担任は焦り、ドキドキ、大丈夫かな? と不安でたまらなかった。しかし、子ども達がじっくり考えたからこそ、決定後はイメージが共有でき、準備や表現練習がとてもスムーズで、劇としてまとまりが早かった。子ども同士話し合うことで、面白い発想がたくさん生まれてきた。

<<職員全体の学び>>

子どもたちが主体的に活動することで子どもならではの発想や子ども同士の共感が多くなる。また保育士の子どもの捉え方や関わり方によって子ども同士の学びや気づきが増えていく。我慢強く、じっと見守り、子どもの力を信じ、待つことの大切さが保育士には必要であることを一番学んだ。

○社会福祉法人愛理会理念

ハートをつないでほっとホーム

未来にはばたく子どもたちの 夢・生きる力を育み

保護者・職員・地域社会がともに育ちあう

○保育目標

- ・健康な体を作る
- ・豊かな心を育てる
- ・より良い人間関係と社会性を育てる

○園児定員

0歳児12名・1歳児19名・2歳児20名・3歳児20名・4歳児20名・5歳児20名

担任が大切にしたい事

- ・子どもの声に耳を傾ける
- ・子どもが悩んだ時には一緒に悩み、一緒に考える。
- ・子どもと一緒に遊び、一緒に楽しむ。
- ・子どもの遊びの保障(デイリーの見直し)
- ・子ども達の楽しんでいる事や遊びが広がる様な環境設定。
- ・子ども一人ひとりが自分の意見を言える場、聞ける場、折り合える場を設けた。(そら組子ども会議)
- ・散歩場所を子どもの遊びによって考える。



子どもの姿

- ・遊びが持続するようになった。
- ・戸外遊びと室内遊びが結びつき遊びが広がる。
- ・友だちと一緒に考えたり、“こうしたら？”など提案し合う姿が見られる。
- ・子どもからそら組子ども会議の議題を出すようになった。
- ・子ども一人ひとりが思いや意見を言えるようになってきた。又聞けるようになってきた。
- ・遊びを通して考える力が育ってきた。

みえる化(可視化)

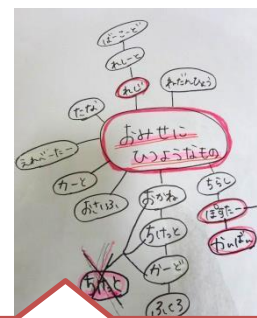
子どもが議題を提案!!
そらぐみ会議



【そらしんぶん】
遊びを主に写真メインで伝える。1週間分を掲示し前後が見えるようにす

【そら組子ども会議録】

見返せるようにファイルに閉じた



【デザインマップ】

1回チャレンジ! 苦手だった…

考察

全員でお店屋さんごっこをすることにスポットを当てていたが、日々の保育の中で少人数から始まる子どもの今楽しんでいる遊びに着目した。子どもはただ遊んでいるわけではなく遊びを通して、『友だちと一緒に考える』『自分の意見を伝える』『友だちの意見を聞く』『友だちと折り合う』『興味・関心が広がる』『集中力』『持続』等を得ている。その為普段から、子どもの“発見・興味・やってみよう”という声や行動を見逃さず関わりをもっているが更にその声を拾い、一緒に考え、一緒に楽しみ遊んだ事により子どもたちの遊びがどんどん発展していく。一緒に楽しむ事が大事だが、大人が入り過ぎてしまうと子どものイメージが薄れてしまう為、子どもの遊びを見ながら出入りする。その為子どもの遊びに合わせた環境作りがとても大事だと感じた。子どもの遊びに合わせた環境を作っていくことで更に遊びが広がっていく。

初めは子ども主体の協同的な学びと聞き考えすぎてしまったが、普段している保育と同じだと思いこれからも子どもと一緒に楽しむ気持ちを共有していきたい。

【子どもたちの姿】

【出来事】

【保育者】

① aの、工作、積み木、お世話遊び。一番は身体を動かすことが大好き。

② 自分のイメージしたものを作るのが楽しくなり夢中になって作っていた。

③ 内容、内装、売り物、全てを子どもたちが考え大成功。1人休みの為19人でべりべりショップを開催。

④ なんか会議みたいという声上がり、子どもたちがこのネーミングを決める。

⑤ 「第2回目もやりたい」「作るの大変だけど20人でべりべりショップやりたい」と声があがる。

⑥ 外遊びよりも室内遊びが楽しい！遊びが途切れず、続くようになる。

⑦ 水に浮かぶ遊具作りを及たちや行つ。試してみて分かったこの発見がたくさん出てきた。

⑧ マジックショーの影響により、真似をして子ども同士でマジックの道具を作り上げ披露する。

⑨ もしかしたらべりべりがこのトンネルにいたのではないかってそんな発想から7人で家を作り完成させる。

⑩ 週末1人の子が公園に行き家を確認すると壊れていたことが発覚し、室内で作りたいと声上がる。

5人で家作りの為に必要な物・家の設計図を描き園庭で木の棒等を探し始める。隊長・平社員と呼び合い遊んでいた。この呼び合いをきにべりべり館を設立しやりたいう一言が子どもが増える。

● 役職がある・会長、社長、副社長、専務など

● 体験チケット・会社の見学が出来試しに働ける。

● 入社テストがある・①面接 ②設計図を見せる

● 仕事の頑張りによって昇格・降格がある

● 会社を辞めるときには・

① 会社で頑張った人・感謝の手紙を書く

② 頑張れなかった人・ごめんなさいの手紙を書く

③ 折り紙で何かを作りメダルにする

【べりべり館決まり事】

⑪ べりとべりが住むことが出来る家が完成する。ベイト・イス・棚・洗濯物干し・固定遊具等を木の棒を使い作る。クラス全員に木の棒拾いの手伝いをお願いする。

⑫ レンガ・積み木・カプラ・動物等の構成遊びをとって遊びの続きを楽しむ。

2月	12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	4月
⑫ 構成コーナーの充実 	⑪ べりべり館の充実 	⑩ 公園の砂場でべりべりの家作り 株式会社『べりべり館』設立 	⑧ 父母会主催のマジックショー 	⑦ 試してみよう ⑥ 室内遊びの充実 	⑤ 第2回べりべりショップ開催 	④ そら組子ども会議 ③ 縁日「こ・べりべりショップ」 	② 工作遊びの充実	① 進級 

① ままごと・机上・絵本・構成のコーナーを設け新年度をスタートさせる。身体を動かす事を好んでいたため主に戸外やホールでの活動が多い。

② 子ども達が工作に夢中になる。その為ままごとコーナーを撤去し工作コーナーを設ける。

工作で使用するものは廃材を利用し、保育者や保護者に協力を仰ぐ（牛乳パック、ティッシュペーパーの芯など）

③ 縁日「こ・べりべり」でお店屋さんをすることが決まり、子ども達に伝える。内容等は子どもたちの案を進めていく

④ 椅子を輪にして座り話し合う。子どもが出した意見を紙に書いて貼り出す。

⑤ 第1回べりべりショップで作り販売した遊具がたくさん残ってしまった為どうするか子どもに投げかけた。子どもたちの“やりたい”という気持ちを受け止め、第2回目に向けて話し合っていた。

⑥ 室内あそびが持続できるようにティリーの見直しをし、朝の当番活動（カメたろう当番・水やり当番）を昼食後に変え室内あそびが持続出来るようにした。

⑦ のりやガムテープ・芯など様々な廃材を使い作っていたが「やってらん」という姿勢で見守る。やってみての気づきや発見が多かった為共有できる場を設けた。

⑧ べりとべりの家作りを始めたので、傍で子どもたちの声に耳を傾け、受け答えをしながら見守った。作った家は、壊さずそのままにして帰園した。

⑨ 室内で、べりとべりの家作りを始めた子どもたちが「隊長・平社員」と呼び合っていた為「会社みたいだね」と伝えると会社作りが始まった。会社にはどんな役職があるのか一緒に調べた。

家作りに必要な、どんぐり・枝・などを使いたいという声があがり子ども達と公園遊びを行う。

家作りに悩んでいた時、3択位方法を提案し選ばせる。一緒に家具作りを行い、べりべり館の社員になり一緒に楽しみ一緒に遊ぶ。

⑪ 子ども遊びが広がる様にテーブルを2台に増やし、コーナーを設けた。

⑫ 工作コーナーをなくし、構成コーナーを設ける。